

大矢和憲の社会科（第6学年）研究計画

1 本研究で目指す子ども

6学年では、「社会科は暗記教科だ」と思ってしまう子どもが増えてくる。この原因は、教科書や資料にある事実に限った知識だけを獲得する学習になってしまっていることにある。6学年の社会科では、我が国の歴史・政治・国際社会における役割について学習する。このとき、社会的事象（歴史的事象を含む※以下：事象）の意味をより広い視野から考え、その価値を感じることができるようにすることが大切である。

そこで私は、6学年の社会科において、**国内の状況と諸外国の状況を関係付けて事象の意味をとらえる子どもを目指す**。この姿は、概念としての社会的な見方や考え方を創り出し、思考としての社会的な見方や考え方（複数の事実を比較・関係付け・総合して見たり考えたりすること）を自覚する姿である。我が国の事象は、国内の状況だけではなく、諸外国の状況も考えて行われていたり、諸外国とかがかわって発展していたりすることが多い。国内の状況と諸外国の状況とを関係付けて事象の意味をとらえることは、事象の価値をより感じることに繋がるとともに、国際社会に生きる上で必要な資質を養うことに繋がる。

これまで、諸外国の状況を取り上げる学習場面はあった。しかし、国内の状況と諸外国の状況とを別々に取り上げることが多く、子どもは国内の状況と諸外国の状況とを関係付けて事象の意味をとらえることができずにいた。また、6学年では学習で取り上げる事実が多く、子どもにとって複数の事実を関係付けて事象の意味をとらえることが難しい。その結果、子どもは事実に限った知識の獲得に止まってしまうのである。子どもが複数の事実を関係付けて考えることに有効な働き掛けが必要である。

これらの問題点を踏まえ、私は以下のように授業を改善する。

- ① 子どもが、事象の意味について追究する学習問題を設定できるようにする。
- ② 子どもが、国内の状況と諸外国の状況を読み取ることができる資料を提示する。
- ③ 子どもが、資料から読み取った事実を基に、学習問題につながるストーリーを考える場面を設定する。このとき、子どもの思考の可視化と自覚化を促すための補助教材として、ストーリーマップを使わせる。
- ④ 子どもが、考えたストーリーの妥当性を確かめることができる資料を提示する。
- ⑤ 子どもが、分かったことや考えたことを総合して再構成する場面を設定する。

さらに、思考としての社会的な見方や考え方の自覚を促すために、日常的に「社会科日記」（宿題）を書かせる。このようにして、目指す姿を具現していく。

2 主張する働き掛け

(1) 「中核的な学習内容」

国内の状況と諸外国の状況を関係付けて事象の意味をとらえること

(2) 「学びをつなぐ力」

- ① 比較するすべを用いて、2つの事象の共通点や相違点（変化）に気づき、驚きや疑問を見いだす力
- ② 関係付けるすべを用いて、これまでの学習で得た知識（既有事項）を想起しながら、学習問題の解決につながる情報（状況や立場、事実など）を見いだす力。
- ③ 関係付けるすべを用いて、学習問題の解決につながる複数の情報を結び付け、事象の意味（課題解決に必要な情報）を考える力

(3) 働き掛け

子どもは、これまでの学習において、取り上げる事象に関して国内、及び関係のある諸外国についての基礎的な知識（用語や事実）を獲得している（C0）。このような子どもに、次のように働き掛ける。

働き掛け1

共通点、または相違点（変化）が分かる2つの事象を提示し、気付いたこと、疑問に思うこと、これからみんなで考えたいことを問う。

事象の意味について考えさせていくために、まず、共通点、または相違点（変化）が分かる2つの事象を提示し、気付いたことを問う。子どもは、**比較するすべ**を用いて、共通点や相違点を発表する。次に、明らかになった共通点や相違点から、驚いたことや疑問に思うことを問う。子どもは、「なぜそうなのか」や「なぜそうなったのか」などと、驚きや疑問を発表する。その後、これからみんなで考えたいことを問う。子どもは、**比較するすべ**や**関係付けるすべ**を用いて、驚きや疑問を焦点化し、「（～なのに、）なぜ～した（する）のだろうか」などと、事象の意味につい

て追究する学習問題を設定する。

働き掛け2

国内の状況と外国の状況が分かる資料を提示し、分かったことや考えたことを付箋紙に書かせる。

根拠となる事実を明らかにして考えさせるために、「どのようなことが分かれば考えられそうか」と問う。子どもは、学習問題を解決するためには取り上げた事象に関する要因や成果が分かれば考えられそうだと考え、それらが分かる資料を求める。そのような子どもに、**国内の状況と外国の状況が分かる資料（「対象」）**を提示し、資料から分かったことや考えたことを付箋紙に書かせる。子どもは、**関係付けるすべ**を用いて、これまでの学習で得た知識（既有事項）を想起しながら、学習問題の解決につながる情報（国内の状況と外国の状況）を見いだしていく。

働き掛け3

小グループにストーリーマップを配付し、学習問題についてのストーリーを問う。

複数の事実を関係付けて事象の意味を考えることができるようにするために、まず、小グループにストーリーマップ（思考の可視化と自覚化を促すための補助教材）を配付し、学習問題についてのストーリーを問う。ストーリーを問うことで、子どもは、**関係付けるすべ**を用いて、付箋紙に書いた情報を整理したり、結び付けたりする。また、ストーリーマップには、学習問題に含まれている事象を結末として示しておく。子どもは、学習問題の解決につながる複数の情報（国内の状況と外国の状況）を結び付け、事象の意味（課題解決に必要な情報）を考える。次に、学習問題の結論を問い、学級全体で話し合わせる。子どもはそれぞれのグループで話し合ったストーリーを基に、補ったり、妥当かどうか判断したりしながら、事象の意味を考える。しかし、子どもはあくまでも自分たちの考えであるため、本当かどうかを確かめなくなる。

働き掛け4

事実が分かる資料を提示し、学習のまとめを記述させる。

子どもが考えた結論の妥当性を確かめさせるために、事実が分かる資料を提示する。子どもは、資料を調べ、自分たちが考えた結論の妥当性を確かめる。その後、学習問題について、分かったこと・考えたこと・思ったことをワークシートに記述させる。子どもは**関係付けるすべ**を用いて、自分たちが考えた結論と資料から分かった事実とを再構成し、**国内の状況と諸外国の状況を関係付けて事象の意味をとらえる子ども（Cn）**になる。

働き掛け5

2つのふり返りの観点を示し、「スーパー社会科日記」を書かせる。

子どもは一連の学習過程において思考しているが、無自覚であることが多い。そこで自分の思考を自覚させるために、日常的に「社会科日記」（宿題）を書かせていく。ここではふり返りの観点として、①「どのように何を学んだのか」自分の学習過程と、②考え方のコツを書くように指導する。こうすることで、子どもは、思考としての社会的な見方や考え方を自覚し、以降の学習においても学び方や考え方を活用して学習していくようになる。

3 検証

(1) 検証すること

- ① 構想した働き掛けにより、「中核的な学習内容」を創り出すことができたか。
- ② 構想した働き掛けにより、「学びをつなぐ力」を発揮することができたか。
- ③ 構想した働き掛けにより、「学びをつなぐ力」を自覚することができたか。

(2) 検証の方法

- ① 働き掛け4を受けて、国内の状況と諸外国の状況から事象の意味をとらえているかどうかを、ワークシートの記述や「スーパー社会科日記」から検証する。
- ② 働き掛け3を受けて、関係付けるすべを用いて、学習問題の解決につながる複数の情報を結び付け、事象の意味（課題解決に必要な情報）を考えることができたかどうかを、発言やストーリーマップ、ワークシートの記述から検証する。
- ③ 働き掛け5を受けて、想定した①～③のいずれかの「学びをつなぐ力」を自覚しているかどうかを「スーパー社会科日記」の記述から検証する。

4 年間の授業計画

- (1) 指定研究授業（5月） 「大陸に学んだ国づくり～飛鳥・奈良時代～」(10時間)
- (2) 中間検討会（9月） 「新しい時代の幕開け～幕末・明治時代～」(14時間)
- (3) 初等教育研究会（2月） 「世界の中の日本～昭和・平成時代～」(10時間)